

唯物論についての覚え書（その一）

阿 部 矢 二

ま え が き

一 唯物論の一般的原则

- A 精神ではなく自然を根源的なものとみる。
- B 自然、物質は人間の感覚、意識にかかわらずそれから独立して存在する。

二 物質と意識

- A 意識は物質の映像である。
- B 感覚、生命の起源とその性質

ま え が き

ここに記述しようとするのは、マルクス主義の科学の共通の基礎となつてゐるところの哲学——弁証的唯物論——についてである。この記述は、私が理解することのできた私のマルクス主義哲学を私の心覚えとしてまとめたいものであり、それをもつて私は、現に私の世界観||人生観||哲学としてゐる。私は今この程度の理解をもつて、

自分なりの世界象を描き、世界の運動の進路を予測し、人類の将来に無限の希望をかけている。だから、私は学問的にも物質的にも貧しいが、それでも、自分としては愉しい。

以前には、カントや西田氏のような観念論哲学しか知らなかったのだが、それらの哲学は私には理解しがたい、又その理解した部分も現実との関連をもつ実践的興味を感じさせるようなものではなかった。それで哲学はその道の専門家でなければいけない狭い門である、私のような素人はその門にはいることを許されない門外漢たるほかないもののように思われた。哲学はわからないものとひとりがぎめして、私は久しくそれに関心をもたないままに、生来的な靈魂や天国についての懷疑的感情をもちつづけた。私には、そうした漠然たる無宗教的感ぜを理論づける哲学がなかった。哲学一般はわからないものときめてかかつていたから。

ところが、ソ同盟「共産党史」のうちで、スターリンの「弁証法的唯物論と歴史的唯物論」を読む機縁を得てから、哲学専門家でない私に十分わかり、したがって、非常にならなるほんとうの哲学・人民のための哲学の存在を知った。読書・研究の手引がみつければ、進むべきその後のコースはおのずから見透された。といつても山頂は麓からでも見通される、麓から仰ぎ見ると自身絶頂に登るのは別のことである。私は哲学のこの山へ登ることを望み、かつ登る努力をして歩いてはいるが、自分がはたしてどれほどのたかきに登り得たか、あるいは麓で道を踏み誤つてちつとも上には登つていないのか、そのへんのところは自分ではなんとも判断をつけ難い。そこで、以下の記述は哲学についての私の理解をたしかにするための習作的ノートであるが、もし批判を得ることができらばなら、批判のために一つの客観的対象をあたえることにもなるであろう。先輩同学の諸学兄の御批判と御教示を乞う。

一 唯物論の一般的原则

A 精神ではなく自然を根源的なものとみる

すべての哲学の根本問題は、思惟と存在・精神と自然・との關係をどうみるかみかたの・立場の・問題であるといわれる。この問題についてのみかたの如何によつて、哲学者たちは相對立する二大陣營——觀念論的哲学者と唯物論的哲学者——に分裂する。この哲学の本質をついた分類の規定は、エンゲルスによつて古典的に不朽のかたちであたえられている。

「この問題——思惟の存在にたいする、あるいは精神の自然にたいする關係いかんの問題、哲学の全体につうじるこの最高の問題（筆記挿入）——にはあれかこれかのどちらかにこたえられたが、そのどちらかにこたえたかにおうじて、哲学者たちは二大陣營に分裂した。

自然にたいして精神が根源的であると主張した人々、したがつてけつきよく、あるならかのみかたの世界創造をみとめた人々は——そしてこの創造は、哲学者たちの場合、たとえばヘーゲルの場合などでは、往々にしてキリスト教でいわれる場合よりもさらにはるかに奇妙であり荒唐無稽であるが——この人々は觀念論の陣營を形成した。他の人々、すなわち自然を根源的なものとみた人々は、唯物論の種々の学派にぞくする。

觀念論と唯物論——この二つの表現は、もともと上述より以外のなものをも意味しはしない¹⁾。」

レーニンもまた、哲學的問題の解決における二つの根本的方向、二つの根本的流派としてこの問題を次のようにいいあらわしている。

「自然、物質、外界を一次的なものに取り、——そして意識、精神、感覺（——現代において普及している用語によれば經驗）心理的なもの等々を二次的なものと見做すべきかどうか、これが、實際において、哲學者たちを、二大陣営に分け続けている根本問題である。」³⁾

近代自然科学の獲得した諸結果は、自然、物質、外界が人間の意識や精神などとはかかわりなしに、永遠から存在していたことを疑をはさむ余地なく明瞭に実証している。地球は生物の發生以前から存在していたという事実についての科学的証明は、今日では一般の常識として受けいれられている。人類は生物の發生以後永い幾百万年かの生物發展の一定の段階にいたつて、はじめて地球上に現われた。人類の歴史は地球の歴史にはくらゝようもないほど若いが、生物の歴史にくらべても遙かに若い。

人類そのものの末生の時期、したがつて、人間の意識、感覺、精神など人間に特有の機能・性質などの存在もまた全く考えられない永遠の太古から自然、物質は存在していた。この人類の存在にたいする自然の根源性——外的自然の先行性——は疑のない客觀的事実である。だから人間や、精神があつての自然や物質ではなく、精神はもとよりのこと、人間そのものが自然、物質の一定の發展段階における産物であるということ、——自然が一次的なもので精神は二次的なものだという唯物論の考え方は、何人でも納得のいく真実だといわねばならない。

神がまず宇宙に存在し、神の力、意思によつて、天地、生物、人間、森羅万象がつくられたという宗教的・神話的天地創造説を素朴に、そのまま主張する哲學者は今日ではかけをひそめたようだが、主体性、直感などを認識の主たるモメントにおいたりする哲学、天皇の系統を普通の人間、人民とはちがう天孫族だとする信仰は、依然として資本主義社会にひろく行われている。

これら一類の考え方は、いずれも精神が根源的、一次的であり、物質的なものは精神にたいして派生的、二次的なものであるとみなすところの観念論的党派に属するものだといえるのである。

B 自然、物質は人間の感覚、意識にかかりなくそれから独立して存在する。

すでに述べたように、自然、物質は人間の発生以前から存在していたのだが、この事実が疑のないものであるかぎり、又自然、物質の根源性を認めるかぎり、当然われわれは人間の感覚、意識、精神などにかかりなくそれから独立に存在するところの自然、物質を認めなければならない。

自然、物質は人間の意識の外に、人間がそれを意識し認めると否とにかわりなく存在する客観的な実在である。意識からの自然・物質の独立性を認めること、これこそ唯物論の基礎的前提であるとレーニン³⁾は教えている。物質の意識、精神にたいする本源性と物質の意識からの独立性との承認を基礎として、その上に唯物論の全理論が構成されているのである。このような唯物論の根本的命題からみちびきだされて、物質とは何かの問題もまた次のように答えられる。

「物質とは、客観的な実在を表示するための一つの哲学的な範疇である。」

「物質の概念は認識論的には——人間の意識から独立に存在し・これによつて模写される、客観的な実在以外の何ものをも意味しない。」³⁾

「物質の唯一の性質は、客観的な実在であり、吾々の意識の外に存在するという性質なのである。」⁴⁾

この物質についての概念は最もひろいものであつて、およそ人間の感覚によつてとらえられ、人間に意識され

るもの、そのすべてが物質としてこの概念のうちに包括される。だからおよそ根源的に実在するものは、すなわち物質だということになる。これが唯物論者の世界観のよつて立つ基盤なのである。

これにたいして観念論者は、物質の根源性を否定し、意識、思惟からの物質の独立的存在を認めようとしなない。観念論哲学の系統に属する学派、学説は極めて多種多様であるにもかかわらず、それらは結局において、物質ではなく神＝精神的なもの——絶対的自我、先験的意識、純粹思惟、絶対理念等々——をもつて根源的だと主張する点でみな一致している。そして、彼らは物質を客観的実在だとは認めないで、何かむなしもの、仮象だといったり、物自体は不可知だといったりしている。

それだから、観念論哲学は、どんなに抽象的概念を豊富に駆使して自身を深遠で、高尚で、俗人にはてんでわからないという意味で最高の学問としてみせかけようとも、その言わんとする中味は「ただ私の観念だけが存在する」ということに帰する。それらは非科学的な独我論、客観的に合理性のない主観論の域を決して出ないのである。レーニンはその著「唯物論と経験批判論」において、観念論者の一代表としてマツハとアヴェナリウスの主観的観念論の理論を批判して「哲学的蒙昧主義」だときめつけている。

「物は吾々の意識から独立に存在することはできない。人はいつも自分自身をば物を認識しようとする衝動知として附け加えて考える。』……………」

吾々が自分を『附け加えて考える』としても、吾々が居合せていることは、架空なことであり、人間以前の地球の存在は現実的なことである。実際、人間は例えば地球の灼熱状態の目撃者たり得なかつたし、その際に人間が居合せていたと『考える』ことは、もし私が自分を観察者として『附け加えて考える』とすれば、私は地獄を觀

測し得るだろうという論拠によつて、地獄の存在を弁護し始めるのと、全く同様の蒙昧主義である。

経験批判論と自然科学の『和解』はアヴェナリウスが寛大にも、自然科学によつてその認容の可能性が排除されているものを『附け加えて考える』ことに同意している、という点において成り立つている。

いくら何でも教養あり、いくら何でも健全な人間なら誰も、地球はその上に如何なる生命も、如何なる感覚も、如何なる『中心項』もあり得なかつたときに存在したということを疑わない。したがつて、地球は感覚の複合だ（『物体は感覚の複合である』）とか、又は『心理的なものと物理的なものが同一となつている要素の複合』だとか、又は『その中心項が決して零の値を取り得ないところの対項』だとかいう結論になるマツハとアヴェナリウスの理論は、哲学的蒙昧主義であり、主観的観念論を荒唐無稽にまで徹底させたものである。」

資本主義の現段階、帝国主義は瀕死の段階にある資本主義として、レーニンによつて規定されている。そしてこの社会体制の矛盾は、資本主義の一般危機となつてすべての自由な諸国とその支配圏のうちで抑えようもなく尖鋭化しつつある。こうした危機に追いこまれた支配階級のイデオロギーは、すべて必然に反動化する傾向を見せる、それで現今の観念論哲学も、また、最も進歩した自然科学の業績をさえこれを蒙昧主義的に逆用することによつて人民が真実に目醒め、自己を解放する科学的理論をつかむことを妨害するだけの麻痺剤の役割をつくすものに墮落させざるをえないのである。

観念論哲学はそうして支配階級にそのイデオロギーの武器として奉仕してきた。すなわち、中世においては、神の天地創造説を理論ずけて僧侶の支配と搾取を擁護し、現代においては、赤魔を創造し反共のデマを捏造して独占資本の世界征服を正当化しようとしている。神や精神の根源性の肯定は、科学と物質的なものの合法性と

一次性の否定だから、「例外なく宗教の弁明」に墮することに帰着するほかない観念論哲学は、宗教と同じ役割——蒙昧主義の布教——啓蒙の妨害——をはたすものである。

「観念論哲学のあらゆる形態はそれがどんな扮装をこらしていても、例外なく宗教の弁明にほかならない。観念論の根本問題も、これをしさいに検討すれば、宗教的なイデオロギーとおなじ基礎にたつてることがわかる。観念論のいろいろな学説は、どんな形式で宗教を弁明し『基礎づけ』るか、という点でのみたがい区別されることが出来る。それでわれわれは、観念論者たちのあいだにつきのようなことをみうける。

かれらは、あるときには、宗教上の教義はただしいという端的な証明をあたえ、あるときには、理論を軽蔑して信仰や感情や天性を讚美し、ときには科学と宗教とをなかよくさせるために両者の勢力範囲に区切りをつける。それゆえに、反宗教斗争をおこなうためにはかならず観念論を暴露しなければならず、また、観念論を克服するためにも科学における坊主主義とたたかわなければならぬ⁶⁾。」

宗教は人民をなだめ、すかし、あきらめさせるための、支配階級の掌中にある鎮静剤だが、観念論哲学はこの宗教を弁明し、支持する帝国主義のイデオロギー的兇器である。イデオロギーは、大衆を麻痺・蒙昧状態においてつかむときも、やはり一つの強力となる、蒙昧な、開明されない強力こそ帝国主義はもつとも必要としている。帝国主義は、宗教と観念論哲学とを原爆とともに愛蔵し、撫育し、擁護するのである。その反面金融資本の支配者は、真実をそのまま真実と認めようとするある種の科学者をよろこばないらしい。例えば昭和二十九年十一月十一日刊「朝日新聞」の記事「アインシュタイン博士の心境」は、そのことを吾々に推察させる。

「私はもう一度人生をやり直すとすれば、科学者や学者、教師などにならうとはしない。私はむしろ鉛管工か

行商人の方を選ぶであらう。その方が現在の状況下でも、なおいささかの独立が得られると思う。（ニユーヨー
ク九日発 AFP）

「註」

(1) エンゲルス「ルードウイヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」マルクスエンゲルス選集・第十五巻下

四四六—四四七頁

「フォイエルバッハ論」 岩波文庫版 四六頁

(2) レーニン「唯物論と経験批判論」第六章・四・永田広志訳 五〇〇頁

レーニンの同著書から、これに関連する部分を次に引用する。

「自然科学は、地球は人間も、一般にいかなる生物も、その上に存在しなかったし、また存在し得なかったような状態において存在したことを、肯定的に主張する。有機物質は後期の現象で、永きにわたる発展の成果である。つまり、感覺する物質は存在しなかったのだ。

物質は一次的のものであり、思想、意識、感覺は極めて高度な発展の産物である。かくの如きが唯物論的認識論であって、自然科学は自生的にその上に立脚している。」（右同書・八七頁）

スターリンは次のようにいう。

「マルクス主義の哲学的唯物論は次のことから発足する。

すなわち、物質、自然、存在は、意識の外に、意識とはかかわりなく存在する客観的実在性であること、物質は感覺や表象や意識の根因であるから、物質が第一次的なもので、意識は物質の映像、存在の映像であるから、意識は第二次的なものであること。」（スターリン「弁証法的唯物論と歴史唯物論」広島定吉訳・二一七頁）

「精神病院に入院したり、又は觀念論哲学者のもとに入門したことの無いあらゆる健全な人間の『素朴实在論』は、物、環境、世界が吾々の感覚、吾々の意識、吾々の『我』および人間一般から独立に存在するという点において成立する。

吾々から独立に存在しているのは他人であつて、高い、低い、黄いろい、固い等々という私の感覚の単なる複合ではないという確固たる確信を吾々の中に造り出したその同じ経験——この同じ経験は吾々の中に、物、世界、環境は吾々から独立に存在するという吾々の確信を造り出す。」(レーニン同書・七九頁)

(3) 右同書 三八二頁

(4) 右同書 三八〇頁

物質とは、人間に彼の感覚において与えられているところの、かつ吾々の感覚から独立に存在しながら、それによつて描写され、撮影され、映写されるところの客觀的实在を言い表すための哲學的範疇である。」(同書・一七四頁)

(5) 右同書 九一—九二頁

(6) 古在由重編「弁証法的唯物論」青木文庫版 一五頁

(7) 「依属感は宗教の基礎である。」フオイエルバッハ。レーニン「哲学ノート」第一分冊・五四頁。

二 物質と意識

A 意識は物質の映像である

人間の感覚によつてとらえられ、脳髓に反映され、模写されるもの——意識されるもの——が「物質」なのだ
が、この物質が物質の映像||意識から独立に存在するということは、生きている人物とその人物の写真とが異なる

存在であるのと同様である。

「吾々の感覚、吾々の意識は外界の映像にすぎない。ところで映写は映写されるものなしには存在し得ないが、映写されるものは映写するものから独立に存在するということは自明である。」¹⁾

感覚、意識、表象、概念等、精神的なもの一般は、物質の映像なのだから、映写されるもの——物質——がなければ映像——精神的なもの——はないわけである、そういう意味で唯物論は、物質の根源性と感覚意識からの独立性とを事実として認める。

唯物論者は「この現実の世界——自然と歴史——を、先入見的・観念論的な気まぐれなしに、それにちかよるものはだれにでも、それがそれみずからをあらわすそのありのままのすがたにおいて、把握しようと決心したのであつた。

空想的な関連においてはではなく、それ自体の関連において把握される事実、こうした事実と一致調和しないことはすべて観念論的な気まぐれとして、これを容赦なく犠牲に供しよう²⁾と決心したのであつた。そして唯物論というものは、一般にこれ以上のなものでもないのである。」

物質に関するわれわれの一切の認識は、もと感覚、意識をつうじて得られるものであり、そのほかの手段・器官によつては決して得られるものではないのだから、われわれは人間の感覚を信用し、それにひたすらたよつて、自然と歴史を把握することにとめねばならない。それ以外の生き方も科学のすすめ方もない。感覚によつて外界に働きかけるとき神秘のベールは破られ真実が、ありのままの事物のすがたが、現われる。「眼と手とが活動を始めるところ、神は終息する。」³⁾ 唯物論者は、人間の感覚は唯一の、最後の客観的实在の映象であると考

えるがゆえに、彼らは成心をもたず、事物についての真実を熱求し、真理にたいしては従順・忠誠である。

吾々は事物にたいする正しい知識を得ようとするならば、事物とそれに直接接触する感覚器官および感覚と意識・思考・概念とを切りはなして別のもののように考えてはならない。知識の源泉は、人体における物質的なものをおしてえられる物質なのだから。

「真の知識はすべて、人間の感覚における物質をつねにその源泉としている。このことが理解されねばならぬのは、つぎの二つの意味においてである。

それはまず、およそ科学は、一般に人間の外官、すなわち眼、皮膚、手、耳、舌、鼻があたえるものを分析することから直接にはじまるという意味においてであり、さらにすべての学者、すべての個人は、一般に世界を具体的に認識する場合には、いつも感覚からはじめねばならぬというもつとせまい意味においてもそうである。」

「感覚は、認識の最初の源泉、最初の形態である。以前になんらかの程度に感覚のうちになかったものは、思考のうちにはない。」

物質・自然・外界は、人間の意識・思惟から独立した客観的な実在であるが、意識や思惟は物質から切りはなされて、それ自体独立に存在し得るものではない。意識は物質の映像・反映であり、この映像は物質の状態に照応する。この照応は完全ではないにしても、人類の発展にもなつてより、近似的なものに進み、かくして吾々の認識は、科学は、絶えずより、たかい程度にその真実性をすすめて行くのである。感覚が物質の完全な映像でないとしても、感覚が写す映像をたよりにする以外に、人はいつたい何を媒介にして外界を知ることができようか。

「吾々の感覚は唯一にして最後の客観的実在の映像である。」——レーニン「唯物論と経験批判論」一七三頁——

B 感覚、生命の起源とその性質

感覚、生命の起原本質はどういふものであろうか。そこにさかのぼつて考えてみると、感覚と物質との不可分離の関係が一層はつきり諒解される。感覚は物質—有機体—生物のある発展段階において、物質そのものから発生したものであり、意識は物質の最高度の発展の産物—頭脳—の所産にほかならない。人間の感覚器官と感覚、意識は、外界との接触—生活実践、生産、労働—によつて不断に発達し高度化して今日の状態にたつた。物質・生物・発展の何万年かの歴史的過程の産物として、感覚、意識は物質そのものによつて産みだされたところの物質の属性なのであり、物質が意識を産みだすには、物質以外のほかからの、何らかの力—神や魂などの力を必要としない。このことは、今では生物学や化学によつて略々実証されている。

（エンゲルス「猿が人間になるにあたって労働がはたした役割」マルクスエンゲルス選集・第十五巻上・参照）

それゆえに、精神が物質によつてつくられたのであつて、その逆に、物質が精神によつてつくられたのではないとする唯物論の認識は、自然の事物と矛盾しない、したがつて、合理性をもつ科学だとして、観念論的な迷妄にまでわされぬすべての人々に受け容れられる理由をもつのである。唯物論は科学の新しい発見や進歩にともなつて、その内容を深かめ、ひろめ、その科学性の基礎をいよいよ確かなものにかためてゆく。感覚、意識、観念が感覚器官、神経系統、脳髓、つまり有機体としての人間の肉體そのもの—物質—の所産であることは、科学が実証する疑のない事実である。思考する器官—脳髓—の作用が止まれば思考も終る。精神は精神としては物質と区別されるが、精神は精神をも物質をもうむことはできない、物質が精神の母胎なのである。

「精神は肉体、感覚と共に発達する……それは感覚と結びついている……頭蓋が生ずるところ、脳髓が生ずるところ、そこから精神も生ずるのだ。器官が生ずるところ、そこから機能も生ずるのだ。」⁶⁾

人間はただ感覚的に存在するかれの頭を介してのみ思惟する。理性は頭の中に、脳の中に、感覚の中枢の中に、永続的な感覚的な基礎をもつ。」

「この感官で知覚しうる物質的な世界、それに吾々みずからがぞくしているこの世界、これのみが唯一の現実的なものである。そして吾々の意識や思惟は、それがいかに超感覚的にみえようと、ある物質的な身体的な器官、脳髓の産物にはかならない。」

物質は精神の産物ではなく、かえつて精神がそれ自身ただ物質の最高の産物であるだけなのである。」⁷⁾

「もし人々がさらにすすんで、それでは思惟と意識とはいつたいなんでしょう、またどこからうまれたか、をたずねるならば、人々は、それらが人間の脳髓の産物であるということを、さらに、人間そのものが、その環境のなかで環境とともに発展した、一つの自然の産物であるということのみをみます。」

そうだとすると、人間の脳髓の所産も、究極においては、むしろ、やはり自然の産物なのだから、その他の自然的連関と矛盾しないで、むしろこれに照応するものだ、ということはおのずからあきらかである。」⁸⁾

「思惟は物質の所産であつて、物質の発展中に最高度の完成に達したものの、つまり頭脳の所産であり、そしてこの頭脳が思惟の器官であること、したがつて大変な誤謬に陥りたくなければ、思惟を物質から切りはなしてはならない。」¹⁰⁾

意識や精神を高度に発展した物質——人間の脳髓——の属性として、したがつて物質そのものの所産として、

認めないで、精神をその物質の根源から切りはなし、物質のそこにおけるそれ自体の独自の存在として主張し容認するものは、すべて観念論にぞくする。精神は物質・肉体のうちに根をもたないというような観念論的な考え方は、自然と人間についての無知からくる原始的な考え方——それが宗教・神をつくりだしたのだが——と相隔ることあまり遠くない、同系列のものだといつてさしつかいなのである。というのには、事実のうえでの理由がある。

すなわち、ずつとふるい時代において「人類はまだ自分みずからの身体の構造についてまったく未知であつて、その夢のなかにあらわれてくるものごとにごかされ、彼らの思惟や感覚をば、彼らみずからの身体のあるはたらきではなく、この身体にすんでいて、その死にさいし、この身体をみすててさりゆく、ある特別な靈魂というもののはたらきであると考えようになつたのであるが——、このふるい時代から、人類はこのような靈魂の外部の世界にたいする關係について思いわずらわざるをえなかつた。」¹¹⁾とエンゲルスはいつているが、現代の観念論も魂・思考・理念を「みずからの身体のあるはたらきではなく」肉体、物質とはべつに独自に存するもの、肉体、物質にそこから——何か絶対者から——あたえられたもののように説く、すなわち、太古の未開人とその本質において、たいしてかわらない物質と精神とに關する認識の上に立つてゐるではないか。

意識が物質によつて産みだされたその属性だとすれば、人間の脳髓を蛋白質から成る組織の極度に発達をとげたものであり、「思惟の器官である」と考へるのは、何んの矛盾もない当然のことである。

脳髓は有機体としての人体のうちで、他のすべての器官と有機的に結びあつて思考の作用をする、つまり、生きてゐる人体のすべての機能と運動とともに、それと切りはなすことのできない状態にあつて思考する。人間が

生きているということがあつて、人間の感覚、意識、思考、精神が働らく、また、それら感覚等々の働らきがあつてこそ人間は生きているのであり、自己の生命を意識するのである。だから生命の起源も有機体⇩物質そのもののうちにもとむべきであり、物質と切りはなして、物質のそとに、神にもとむべきではない。

エンゲルスは「反デューリング論」のうちに生命について、次のような説明をあたえている。

「生命がみいだされるところではどこでも、それがある蛋白質に関係のあることがわかるし、また分解過程にはいつていない蛋白質がみいだされるところではどこでも、例外なしに生命現象がみいだされる……。

吾々の知つている最下等の生物は、まさに簡単な蛋白質塊にはかならないが、しかも、それらはすでに、あらゆる本質的な生命現象をしめしている。¹²⁾」

観念論的な迷彩をほどきされ、神秘的な外被をきせられ、その真実の姿を蔽いかくされたところの生命、靈魂、精神の起源と、本質とは、唯物論の立場からはじめて科学的に解明され、万人のまえに明白になつた。

「生命とは蛋白質の存在のしかたである。そしてこの存在のしかたというのは、本質的には、これらの物体の化学的諸構成要素の不断の自己更新のことである。¹³⁾」

存在するものは物質であり、物質の存在の仕方は運動である。運動しない物質は考えられない。この弁証法的唯物論の根本的認識は、生命についての認識にもそのまま正しく妥当するのである。——生命とは蛋白質の存在のしかたである。——生命の存在のしかたは不断の物質代謝であり、ふるいものが絶えず死ぬと同時に新しいものが絶えず生れること、すなわち運動である。

「すべての生物に一樣に存在する、この生命現象の本質は、どこにあるか。なによりもまず、蛋白質がその環

境から他の適当な物質をとり入れ、それを同化し、他方、この蛋白質の他のふり部分分解し排泄される、という点にある。¹⁴⁾」

「生命、すなわち栄養と排泄とによつておこる物質代謝は、それ自体によつておこなわれる一つの過程であり、この過程は、生命のない手である蛋白質に内在する、それ固有のものであり、また蛋白質はこの過程なしには生命が存在できない。¹⁵⁾」

生命についての謎をとくことができるということは、とりもなおさず、物質・自然と意識・精神との関係について物質の先行性、根源性にたいし、終始一貫した理論と認識とをもっていることの当然の結果なのである。生命が、感覚が、物質——生物——人間——の運動の仕方であり、したがつてその存在の仕方であり、その属性の一つであるという唯物論の認識は、人類の歴史的实践と、それによつて正しさを検証された科学的理論との綜合によつて得られたものであり、その客観的眞実性は殆んど疑をいれる余地がない。それは人類発展の現段階における唯一無二の、眞理である。フオイエルバッハは「唯物論は最後の客観的眞理としての感性的世界から出発する。¹⁶⁾」といつている。この出発点の正しさは、実践による検証の結果の到達点——認識——の正しさとあいまつて、唯物論の諸原理の客観的科學性を実証している。「諸原理は、それらが自然と歴史とに一致するかぎりだけ、ただしいのである。¹⁷⁾」

眞理は実践の検証にたえて、結局感性的なものうちに生き続ける。吾々が物質において知覚するところの諸性質に應じて、そのものを吾々の用にたてる瞬間に、吾々の知覚するところが正しいか否かが、まちがいなく吟味証明される。正しければ所期の結果、効果がえられるし、正しくなければそれがえられない。この經驗的事実

によつて、反映としての意識とその外における対象——物質——との照応、われわれの感覚をもととする知識の客観的な正しさが立証されるのである。(エンゲルス「反デューリング論」五四—五五頁参照)

「対象的真理が人間の思惟に到来するか否かという問題は、何等理論の問題ではなく、一の実践的問題である。人間は真理を、即ち彼の思惟の現実性と力、その此岸性を、実践において証明せねばならぬ。」¹⁸⁾

毛沢東もまた、真実の理論は一つしかないと言つてゐる。

「真実の理論は、世界に、ただ一種類しかない。つまり、客観的な現実のなかから引きだされ、また、客観的な現実によつて証明された理論がそれであつて、このほかには、われわれのいう意味での理論といえるものは、なにもないのである。」¹⁹⁾

物質の客観的存在・運動を認め、そのうちから理論をみちびきだし、理論を客観的存在によつてテストすることを主張する唯物論の正しくて合理的な立場にもかかわらず、あるいはむしろ、その立場が理性になつてゐるゆえに、根本において不合理の上に築かれた階級社会においては、唯物論は支配階級によつてまさにその反対物に転化され、歪曲されて人々に教えられ伝えられている。そして、唯物論にたいする誹謗、歪曲、否定は、当然觀念論の賞揚、讃美、肯定となつてあらわれる。

労働するものと労働しないものとの二階級に分裂した社会では、精神は物質と対立し、支配階級は精神的なものを独占し筋肉労働を蔑視することによつて階級的優越をほこる。したがつて彼らは一般に物質的な関連を断つた抽象的、觀念的なものを尊崇して、具体的、物質的な考え方をいやしみ、軽蔑する。この階級的で低劣、卑俗な偏見によると「觀念論、理想主義、精神主義」といふのは、徳、普遍の人類愛および一般に「よりよい世界」にた

いする信仰²⁰⁾」を意味するのであり、「唯物論というのは、牛飲馬食、目の保養、肉欲や虚栄心、金銭欲、強欲、所有欲、利殖や投機、要するにあらゆるけがらわしい悪徳——彼らみずからひそかにそれにふけり、その奴隷となつていづつさいの悪徳——のことである²¹⁾」。

このような全く正しくない顛倒した考え方や偏見を、ひろく撒きちらす役目をするところの道德、宗教、思想などを保護助成したり、一般教育のうちにこれらの考え方をそのままとり入れたりする支配階級の人民にたいする諸政策を、蒙昧主義といわずして何んと呼ぼうぞ。

「註」

- (1) レーニン「唯物論と経験批判論」 七九頁
 - (2) エンゲルス「ルードウイヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」マルクスエンゲルス選集・第十五卷下・四八一頁
 - (3) レーニン「哲学ノート」 六一頁
 - (4) 古在由重編「弁証法的唯物論」 一八五—一八七頁
 - (5) マルクスはいつてゐる。「思惟を思惟する物質から切りはなしてはならない。物質が万物変化の主体である。」（スターリン「弁証法的唯物論と歴史唯物論」二一八頁）
- 「觀念的なものは、人間の頭の中で転変され翻訳された物質的なものに他ならぬ。」（マルクス「資本論」長谷部文雄訳・青木書店版・八六頁）
- (6) レーニン「哲学ノート」第一分冊・哲学研究会・六一頁
 - (7) 右同書 五五頁
 - (8) 前出・エンゲルス「ルードウイヒ・フォイエルバッハ」四五一頁
 - (9) エンゲルス「反デューリング論」マルクスエンゲルス選集・第十四卷 一一七—一一八頁
 - (10) 前出・スターリン「弁証法的唯物論と歴史唯物論」二一七頁
 - (11) 前出・エンゲルス「ルードウイヒ・フォイエルバッハ」四四五頁

- (12) エンゲルス「反デューリング論」マルクスエンゲルス選集・第十四卷 一八五頁
右同書 一八四頁
- (13) 「生命、すなわち蛋白質の存在のしかたは、なによりもまず、蛋白質はあらゆる隣りにそれ自身でありまた同時に他のものである、ということである」(前出「反デューリング」一八五頁)
- 「運動は物質の存在のしかたである。運動のない物質は、いどこにもなかったし、またありえない。」(前出「反デューリング」一五三頁)
- (14) 右同書 一八五頁
- (15) 右同書 一八六頁
- (16) 前出・レーニン「唯物論と経験批判論」一七五頁
- (17) 前出・エンゲルス「反デューリング論」一一七頁
- (18) 「フォイエエルバッハ論」——マルクス「フォイエエルバッハ論綱」岩波文庫 一〇四頁
- (19) 「整風文獻」のうち毛沢東「学風、党風、文風を整頓せよ」国民文庫版 三二頁
- (20) 前出・エンゲルス「ルードワイヒ・フォイエエルバッハ」四五九頁
- (21) 右同書 四五九頁